

養蜂めぐり歩き <その1>

はじめに

養蜂は人類が太古から行っている伝統的な農業である。スペインの洞窟で発見された約1万年前の壁画にはすでに養蜂が描かれているらしく、エジプトやギリシャ、インド、中国など世界中で古くから行われてきた営みである。養蜂はミツバチを飼育してハチミツや蜜ロウを収穫するということから畜産（livestock）に分類されることが一般的なようだが、養蜂は牛や羊、鶏などの家畜による畜産やコメや野菜などの栽培といった他の農業活動とは大きく異なった特徴を持っている。

ミツバチは巣から半径数キロメートルの範囲で花粉や花蜜を集めている。ミツバチにとっては野生の花も栽培された花も関係なく、この空



近代的養蜂箱を使用し始めた農家

間から花粉などを採集してくる。したがって養蜂は、最低限養蜂箱を置くことのできるスペースさえあれば始めることができる。また、その土地は平地である必要もない。これは、農地が広がるほど生産量や作業効率が高まる作物栽培などの農業活動とは大きく異なる点である。また、ハチミツは主要な非木材林産物であり、森林資源を活かした活動として伝統的に森林地域に住む人々によって営まれてきた。これらのことから、養蜂は土地を持たない小農や女性グループなどにとっても小規模で始めやすい収入活動となり得る。

ミツバチは花粉媒介者としても重要な存在である。リンゴやウメ、イチゴなどの生産では、ミツバチを受粉に利用している。特に日本でのイチゴのハウス栽培では、開花期にミツバチを購入し、ハウス内に放ち受粉するのが一般的であり、これを専門とする養蜂農家も存在する。野外の養蜂の場合も、ミツバチが採集する花粉や花蜜は、他の

農業生産活動には利用されない、未利用の資源である。そのため、他の農業活動と競合することはなく共存可能である。さらに、ミツバチはこれら花粉をつける花、その花が生育する森林などの自然環境とも深く関係していることから、養蜂を通じた環境保護への意識向上や啓発の可能性も考えられる。養蜂は、それ単体でも産業となり得るが、園芸作物生産や森林生態系とも深く関連した非常に多面的な農業活動である。

一方で、現在もアジア・アフリカの森林地域で行われている伝統的な養蜂には課題もみられる。この地域の伝統的な養蜂とは、木製の筒を木の枝に括り付け、女王蜂が自然と筒の中に入り巣を作るのを待ち、ハチミツの収穫時には巣を破壊するといった方法で、この筒には天然の樹皮が多く使用されている。木筒は1度しか使用できず、ハチミツの生産性も低い。また、従事者が木筒を抱えて高い木を登り降りしなければならないといった命の危険、巣を毎回壊すことによる森林資源への負荷、そしてミツバチを大人しくするために用いる燻煙器の取扱不注意による山火事といった危険もはらんでいる。

このシリーズでは、主にアフリカを中心に各地の養蜂方法に注目し、アフリカ東部で現在も行われている伝統的養蜂から養蜂箱を利用した近代的養蜂まで、それぞれについて検討、考察をしていきたい。



木の枝に掛けられた伝統的養蜂の木筒